

- S1M 2014年総括
- S1M ユーザーアンケート
- 第4回 S1M ワークショップを終えて

話題を呼んだ米国と日本の S1M ユーザーカンファレンス

米国 Thomson Reuters 社主催のカンファレンス『ScholarOne Manuscripts User Conference 2014』が4月10日～11日にフロリダ州のフォートローダーデールで開催され、アメリカやイギリスの学協会と出版社を中心に、弊社を含め世界中から約150名が参加しました。この会議では、Thomson Reuters 社による「ユーザービリティ向上のための取り組み」や、上級ユーザーによる「S1Mの上手な使い方」など20のプレゼンテーションが行われました。ユーザービリティの向上については、近い将来「投稿操作を中心にレイアウトを一新する」との発表があり、上級ユーザーによるプレゼンテーションでは「自由入力」のキーワードの表記を統一させる方法」や「Editor Kick」をフローに組み込むことにより審査期間を短縮できることなど興味深い発表がありました。

User Conference 開催直前の4月7日～9日の3日間には『ScholarOne Full Configuration Training』も実施されました。弊社からS1Mのサポート担当2名が参加し、サイト構築や設定変更の際の応用力を身に付けるためのトレーニングを受け、知識を深めることができました。

一方、国内では、弊社とトムソン・

2014年さらに進化した SCHOLARONE MANUSCRIPTS™

お陰様で今年もユーザーカンファレンスをはじめとする様々なイベントを開催し、大きな反響を頂きました。またS1Mの機能にも重要な追加・変更が行われ、より魅力のある製品に向けてバージョンアップが実現しました。本年最後の発行となる本号では、それらを順に振り返りご案内させていただきます。

ロイターの共催で9月4日に『S1M ユーザーカンファレンス2014』を開催し、過去最多となる約80名の学協会様にご参加頂きました。3回目を迎えた本カンファレンスでは、「研究・出版倫理」をメインテーマとして取り上げ、東京大学医学部医学教育国際研究センター教授で JAMJE (日本医学雑誌編集者会議) 組織委員会委員長の北村聖先生による「不正論文」についての特別講演の他、ユーザープレゼンテーションとして

今年新たな取り組みとして少人数制でのS1Mワークショップを開始しました。開催においては「S1Mをより深くご理解頂く」ことを加え、「ユーザー間で情報を共有して頂く、横の繋がりを作る機会を提供する」ことも意図しています。ユーザー間で様々な情報を共有することにより、日常業務の課題を解決するヒントを見つけられるものと考えています。

合計4回のワークショップが開かれ

新たな取り組みとして好評を頂いた少人数制ワークショップ

Thomson Reuters社のGeorge Kowal氏も米国より来日し、「世界の学協会からS1Mが選ばれている理由」について発表を行いました。次回も本年と同様、旬なテーマを取り上げて皆様へ有益な情報をご提供できればと考えています。

ました。第1回は1月28日～30日の3日間に行われ、「論文の投稿から判定までの一連の基本操作やイレギュラー時の対応方法」を、第2回は3月25日～28日の4日間に「委員会での資料作成を目的とした Cognos Report の使い方」を、第3回は5月27日～29日の3日間に「日常業務の効率化に向けた e-Check、テンプレートの活用」を、そして第4回は12月2日～5日の4日間に「事務局レベルの有する様々な便利機能」をそれぞれテーマとして取り上げ、参加者の皆様に機能説明を行いながら操作を体験頂きました。事後アンケートの集計結果では多くの方に「満足頂き、「分かりやすい」「参考になった」などの声が寄せられています。詳細については裏面で記載してありますので、是非そちらもご覧ください。

新たに運用開始したジャーナル

お陰様で毎年S1M導入ジャーナル数は着実に増えている状況ですが、今年は12ジャーナルで運用が開始されました。

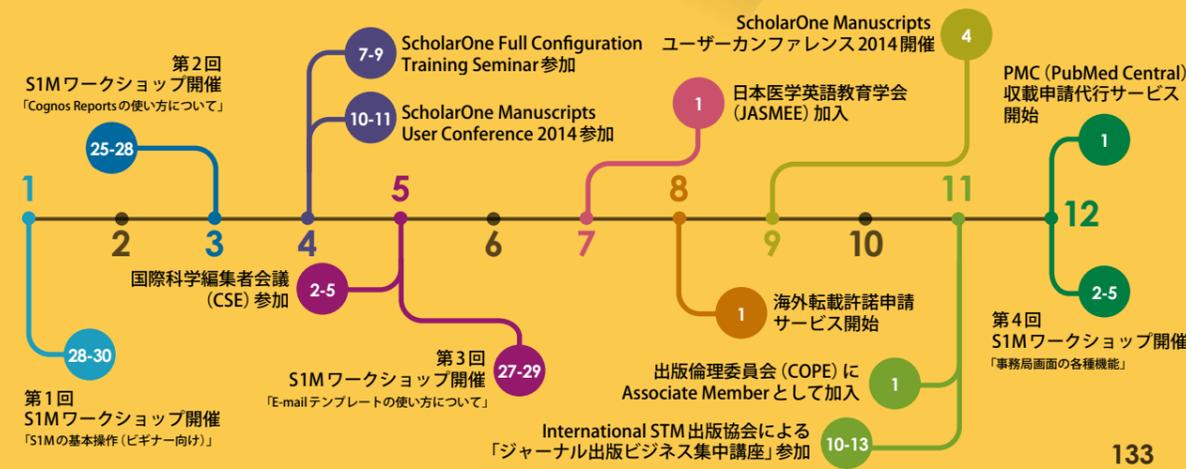
その他、サイト構築済みで運用検証中のジャーナルが12誌、来年初旬にサイト構築予定のジャーナルが5誌ございます。

新規採用いただきました学協会様および、ご利用いただいている学協会様に感謝申し上げます。

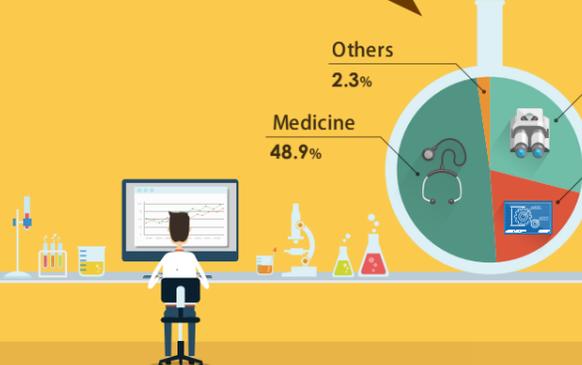
2014年に行われたバージョンアップ

- Ver. 4.15 6月10日実施
- 画面上のヘッダとフッタが新しい外観に
 - 表示言語の切替機能を追加
 - FundRefの機能強化
 - 出版社用のレポート機能を追加
 - 剽窃検知：前回投稿論文の一致率を表示可能に
 - 依頼論文の画面表示を改善
 - 重複アカウントの管理機能を強化
 - 「査読者リスト」内に期限延長リンクを追加
 - ダッシュボードへの項目追加
 - 論文リストとヘッダに著者の代理 (Proxy) リンクを追加
- Ver. 4.16 12月8日実施
- 推奨ブラウザの更新
 - 国名リストがISO3166に適合
 - 「作業を行う (Take Action)」のプルダウンメニューに「ファイル管理 (Manuscript Files)」を追加
 - メールフォームのフッターを縮小
 - SSL 認証の利用開始 (現在 http と表示されている S1M サイトの URL 起首が https となります)

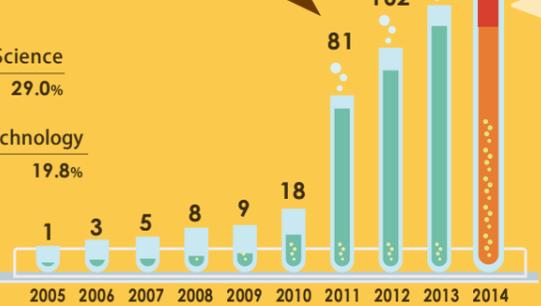
杏林舎による2014年S1Mおよびジャーナル出版に関する活動



S1M 導入ジャーナルの 카테고리



S1M 導入ジャーナル数の推移



2014年新規導入ジャーナル12誌

1. 日本公衆衛生学会：日本公衆衛生雑誌
2. 災害看護グローバルリーダー養成プログラム：Health Emergency and Disaster Nursing
3. 日本婦人科腫瘍学会：日本婦人科腫瘍学会雑誌
4. 日本ロボット学会：日本ロボット学会誌
5. 日本脳神経血管内治療学会：脳神経血管内治療
6. 日本看護研究学会：日本看護研究学会雑誌
7. 日本獣医皮膚科学会：The Japanese Journal of Veterinary Dermatology
8. 高度情報科学技術研究機構：HPCI 利用研究課題 利用報告書
9. 高度情報科学技術研究機構：HPCI 利用研究成果集
10. 日本耳鼻咽喉科学会：日本耳鼻咽喉科学会会報
11. 日本女子体育大学：日本女子体育大学紀要
12. 日本小児内分泌学会：Clinical Pediatric Endocrinology

S1M ユーザーインタビュー

日本肺癌学会様、日本ロボット学会様、日本消化器内視鏡学会 関東支部様に、導入に至った経緯や導入後の感想などをお話し頂きました。ご協力を頂きました学協会様には、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

著者も査読者も「期限を厳守」
するようになり、採択までの
期間が短縮できました。

日本肺癌学会

Q. 導入以前の運用方法を教えてください

著者からの原稿を査読者に、戻ってきた原稿をまた著者に…と「紙と郵送」での運用はとにかく手間がかかっていました。締切日を過ぎてでも再投稿されなかったり、査読期限までに審査結果が戻らないといったケースもよくありました。

Q. 導入に至った経緯を教えてください

論文の投稿から採択までの期間の短縮と、編集業務の見直しです。

Q. 導入時の苦労を教えてください

操作に関する質問が集中することを予想していましたが、先生方がWeb投稿に慣れていたので大きな問題は起こらず、スムーズに導入できました。導入1年前から告知を続けたことが成功につながったのかもしれない。ただし導入当時、事務局が操作に慣れておらず、慣れるまでの苦労はありました。また、サイトが年々バージョンアップし充実はしましたが、英語表記に関しては今も戸惑いがあります。

Q. 導入して良かったと思う点はどこですか？

著者も査読者も期限を厳守するようになり、採択までの期間が短縮できました。紙原稿の保管や管理から解放されたことも大きな改善点です。先生方からも「紙原稿を持ち歩く必要がなくなった」「出張先からでもチェックできるし発送の手間が不要になってずいぶん楽になった」との感想をいただいています。

Q. 反対に、導入してマイナスになった点は…？

特にありませんが、強いて言えば「システムがフリーズしてPC操作が進まない」「データの吸い上げにタイムラグがあるのか、レポート機能などで最新データが反映されていないことがある」といった苦情がたまにあります。

Q. サポートについて、ご意見をお願いします

どんなにくだらない質問をしても、いつも丁寧に答えていただいております。

Q. ワークショップに参加していかがでしたか？

導入時期が近い参加者ばかりでしたので、お互いに質問しやすく、同じような悩みを持っていることもわかり安心してました。投稿から判定までの一連の操作の説明を聞き、一通りの理解が出来ましたので操作に自信が持て、問い合わせる回数がかかり減ったと思います。

Q. 導入以前の運用方法を教えてください

学会の理事メンバーが独自に開発した編集査読システムを使用して、論文審査を行っていました。また、査読の割り当てやフォローアップは編集委員会が人海戦術で行っていましたので、かなり負担が大きかったです。

Q. 導入に至った経緯を教えてください

人海戦術を改善したいという思いに加え、関連学会の間でS1Mを導入する動きが見られたこと、そしてJSTによる補助事業が始まったことが導入の決め手となりました。

Q. 導入時の苦労を教えてください

大きな困難というものはありませんでしたが、導入準備から、導入後、システムを完全に理解するまでおおよそ一年の歳月が必要でした。

Q. 導入して良かったと思う点はどこですか？

人海戦術に頼った編集作業が合理化でき、査読効率がかなり上がったと思います。査読期間で言えば、概ね20%は短縮できるようになりました。

Q. 導入以前の運用方法を教えてください

郵送にて、編集部→査読者→編集部→著者の順でやり取りを行っており、原稿をホチキスで止めたり、控えを取るために外してコピーしたり、といった作業が大変で、前回査読分なども添付して郵送していたのがとても不便でした。

Q. 導入に至った経緯を教えてください

他誌でオンライン査読を経験していた先生方が利便性を唱えたことに加え、J-STAGEとの連動もあり、意見が速やかにまとまりました。その矢先にJ-STAGEのオンライン査読に運よく選ばれました。

Q. 導入時の苦労を教えてください

本誌の査読フローが通常と大きく異なるため、構築時に独自のカスタマイズや、投稿規定の変更、専用の投稿マニュアルが必要でした。投稿された原稿をPDFにすると、ファイルの順番がバラバラで図表のキャプションが表示されなかったり、データと写真の比率が違うなど、これまで紙の運用では見えていなかった原稿の不備を発見するようになり、編集部での作業は増えました。

Q. 導入して良かったと思う点はどこですか？

元々時間の無いなかで進行していたので、郵送期間の2～3日を減らせ、査読期間を増やすことができて良かったと思います。短期間で多数の論文を扱っているため、該当論文をネットワークで検索できるのも便利ですし、郵便では気付かずに放置されることがありましたが、オンラインだとすぐに対応してくださる点、原稿内の読みにくい文字がなくなった、なども改善された点です。また、編集事務局で紙原稿を保管するボックスがだいぶ減りました。

人海戦術に頼った編集作業が
「合理化」でき、査読効率が
かなり上がりました。

日本ロボット学会

Q. 反対に、導入してマイナスになった点は…？

特にありません。

Q. サポートについて、ご意見をお願いします

問題はないと思います。

Q. ワークショップに参加していかがでしたか？

A. システム導入に関する基本事項を改めて理解することができました。OJTを通じて、詳細な作業ノウハウを得られたことは大きなメリットでした。

郵送期間の2～3日を減らし、
「査読期間を増やす」ことができて
良かったと思います。

日本消化器内視鏡学会 関東支部

Q. 反対に、導入してマイナスになった点は…？

システムメールが迷惑メールフォルダに入ってしまう原稿提出が遅延したり、著者のメールアドレスに不備が多く、宛先不明によるエラーメールが多く届きます。また、査読者が見やすいPDFにするため、図表のキャプションを入れ直す等の作業が発生したり、推薦状・誓約書は、紙に書いてスキャンしたものをアップロードしていただいているため、PDF以外の画像ファイルでアップロードされると、解像度やサイズ設定によっては「縮小され読めない、暗い、周りが切れる」ことがあり、編集部で印刷して再スキャンなどの対応をしています。

Q. サポートについて、ご意見をお願いします

パーフェクト！急ぎで時間がない時などに作業をお願いすることがありますが、早急かつ丁寧に対応いただき感謝しています。

Q. ワークショップに参加していかがでしたか？

システムについて、他学会様の運用における工夫を学ぶよい機会をいただきました。

編集後記

今号では、S1Mと杏林舎の2014年の活動をまとめてご報告いたしました。こうして振り返ってみると2014年は、S1Mユーザーカンファレンスの開催や海外セミナーへの参加の他、新たな取り組みとして、S1Mワークショップを始めるまで、盛り沢山の1年でした。不慣れな部分もございましたが、いずれも皆様から好評をいただくことが出来、大変嬉しく思っております。また、ユーザーインタビューでは、S1M導入により改善された点などについてお話をうかがいました。3学会の皆様、ご協力ありがとうございました。

2015年もS1Mの一層の利便性向上と情報の共有に努めてまいります。皆様のご支援、ご協力をよろしく願っています。さっそくですが、2015年最初のイベントの告知です。1月20日にCOPE(出版倫理委員会)前委員長のDr. Liz Wagerを招き、出版倫理セミナーを開催いたします。Authorship、COIなど、皆様が直面している問題を解決する一助となれば幸いです。近日中にご案内しますので、是非ともご参加ください！

(鳥海 英夫)

S1M NEWS

2014年12月18日発行 第5号

発行

株式会社 杏林舎
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10
TEL.03-3910-4311
FAX.03-3949-0230
URL http://www.kyorin.co.jp

編集・制作・デザイン

株式会社 杏林舎
E-mail s1mnl@kyorin.co.jp

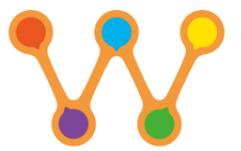
「事務局の便利機能を活用し、サイトを使いやすいと整備しましょう」というテーマのもと、本年最後の第4回ワークショップが12月25、5日に開催されました。事務局ツールの使い方やマニュアルの設置方法などサイトの設定に関する内容が多く、新年度への準備にピッタリの内容ではなかったでしょうか。

「もっとS1Mを使いこなしたい」「日頃の疑問を解消したい」といった声にお応えして、S1Mワークショップは本年1月よりスタートしました。ユーザーカンファレンスよりも少人数のなごやかな環境において実務レベルで役立つ情報を提供し、ユーザー間でのコミュニケーションの場にしていただきたいという思いで開催を続けたところ、延べ104名にご参加いただきました。参加者への満足度調査は、満足…64%、ほぼ満足…32%、不満…3%となり、毎回のように参加して下さる熱心な方もいらっしゃるなど、大変好評で嬉しい限りです。もちろん厳しいご意見を頂くこともありますので、アンケート結果を基に課題を解決し、より良い場を提供できるよう努力して参ります。

2014年 セッション別満足度トップ5



来年は新規ユーザー様向けのワークショップの他、特に反響の大きかった事務局ツールやレポート機能などをもう少し掘り下げる機会を作られれば、と考えています。少人数制であることを活かし、初めて参加される方にもわかりやすい説明と質問をしやすい雰囲気作りを心掛けてまいりますので、まだ参加されたことのない方も是非お気軽にご参加ください。回を追うごとに応募人数が増えていきますので、興味のあるテーマがありましたら、お申し込みはお早め！来年も皆様にお会いできる日を杏林舎一同心待ちにしております。



SCHOLARONE
MANUSCRIPTS
ワークショップ

第4回を終えて